



美しい里山を取り戻す活動が 15世帯の移住に結びついた！新盛里山耕流塾！

美しい里山の風景に囲まれて育った子どもも達。高度経済成長期、その子たちは多くの若者と同じように豊田の街に通勤し、豊かで便利な生活を求めて働ききました。自宅のある足助・新盛自治区には寝に帰るだけの暮らし。ふと気がつく、かつての美しい風景は失われてしまっていました。「自分達の世代が荒らしてしまったのだ！美しい里山を再生したい！」そんな想いから定年退職の年齢を迎えようとしている仲間が集まり平成18年4月に始まった『新盛里山耕流塾』。どんな活動があり、どのような効果があったのか。中心メンバーとして活躍されている鈴木邦夫さん（初代実行委員長）、鈴木智さん（現実行委員長）に、辰吉センター長がお話を伺いました。



左・鈴木智さん（71） 右・鈴木邦夫さん（73）

都市との交流を中心とした活動
鈴木辰吉（以下・辰吉） 活動をはじめられてから10年が経っていますね。どんな活動をされてきたのでしょうか？
鈴木邦夫さん（以下・邦夫） 里山での暮らしの営みを楽しみながら体験できる講座や、市民農園など都市の方たちとの交流を中心に行ってきました。
辰吉 どうして都市との交流をメインにしてきたのですか？
邦夫 人口を増やしたいという思いはあったのですが、いきなり移住者を増やそうとしても簡単にはいかないだろう。まずは、交流をして外部の人にこの地域を理解してもらうことから始めてみようということになりました。
何とかしなければという強い思い
辰吉 そもそもなぜ新盛里山耕流塾をはじめることになったのでしょうか？
邦夫 定年を迎え、ふと気がつく、山が荒れていました。竹藪もすごいことになってい

たし、葛の葉に覆われているのもいかにも放っておいたという感じがしました。寄合で地域の皆と相談し、自治区としてわくわく事業で申請することになりました。
鈴木智さん（以下・智） 何とかしなければいけないという思いが強かったです。
10年の活動の中での苦労と楽しみ
辰吉 活動を続けてきて苦労されたことを教えてください。
智 活動を始めた当初「自分の山も手入れできないのに、何で人の山までやらなきゃいかんだ」という人がいて困ったことがあります。
邦夫 そういう人も都市の方たちとの交流の楽しみを知るようになって、徐々にやる気になってくれました。
辰吉 楽しかったことは何がありますか？
邦夫 里山耕流塾というからは、『里山とはどういう所か？』という自分を自分たちでも解っていないといけない。『里山とは、こんなような場所ですよ』というだけで

は、都市の方に具体的に説明することにならない。それじゃあいけないということ。『あいち海上の森大学』に1年通って学びました。自分の知識の裏付けが取れて自信がついたり、色んな勉強ができたことに喜びを感じました。
智 活動に関わっていた名古屋大学の高野先生が主催していた『足助千年ゼミ』も良かった。参加して「人の話が聞けるようになった」と感じます。
辰吉 足助千年ゼミは、誰でも参加自由で「新しい里山の暮らしのあり方」を月1回話し合う場だったんでしたよね。「人の話を否定しない」というルールがありましたね。



真ん中・鈴木辰吉センター長

イベント情報

第2回 ーしなやかな心 宇宙につながる体ー じねんの学校で学ぶ

じねんに生きる。自然の「ちから」。私たちの内なる生命の「ちから」。大きな力の導きで、自然に生まれ、自然に暮らし、自然に還っていく。自ら然らしむように生きる。「じねんに生きる」生き方を一緒に考えませんか。
●日時：1月31日（日）10:00～16:30（開場9:30）
●場所：高橋コミュニティセンター2F大会議室
●定員：400名
●参加費：【前売】通し券5,000円 第1部3,000円【当日】第1部3,500円第2部2,500円
●申込方法：下記URLのフォームからお申込ください。
<http://www.kokuchpro.com/event/jinennet>
●問合せ：Tel.090-5453-6411（じねんネットワーク代表 山本）

新☆豊田市誕生10周年プロジェクト連携事業 平成27年度 いなかとまちのくま座ミーティング いなかとまちのミライを考える

基調講演に博報堂ブランドデザインの深谷信介氏を迎え、「いなか」と「まち」両方の「社会にとって有意義な魅力ある個性」を見つめなおし、それを外部に伝えていく方法を学びます。その後の分科会では、「移住・定住」「食と農」「スモールビジネス」の3つの観点から、多彩なゲストをお招きし、豊かで持続可能な地域づくりについて考えます。

●日時：2月20日（土）10:00～17:00
●場所：豊田商工会議所 多目的ホール（豊田市小坂本町1丁目25）
●プログラム：

■第1部
10:10 基調講演
豊田らしいって、何だろう？「地域の『らしさ』～その見つけ方と伝え方」
講師：深谷信介さん（博報堂ブランドデザイン）
11:10 『里co』トークショー「里coー等身大の私が発信する」
■第2部
13:30 くま座談義
分科会①食と農専門部会『おいしい』から見えるミライの農」
ゲスト・野中慎吾さん コーディネーター・澁澤寿一さん
分科会②移住・定住専門部会『いなかのシェアハウスー腑に落ちる暮らし方・働き方』ゲスト・三星千綾さん、藤井裕也さん、戸田友介さん コーディネーター・高野雅夫さん
分科会③地域スモールビジネス研究会「実はいっぱいある地域の小仕事」
ゲスト・深谷信介さん コーディネーター・加藤栄司さん
■第3部意見交換会（交流会）場所：会場近辺の飲食店 会費：5,000円程度
●申込方法：
氏名、電話番号、E-mailアドレス、住所、所属（団体・会社等）、参加希望の部（第1部、第2部は上記①②③から第2希望まで、第3部）の出欠を○×で記入し、FAX：0565-62-0614もしくはsanson-center@city.toyota.aichi.jpまでお送りください。締切は、2月10日（水）必着。

その他の情報は、センターHPをチェック！
<http://www.oiden-sanson.com/event/>



田舎を田舎らしく磨き上げる

この国において農村部と都市部の人口が逆転したのは1950年代、都市に人口が集中し過疎が社会問題化したのは1960年代であった。以来、今日まで約半世紀「格差是正」を主眼とした対策が三度の過疎法改正（延長）の下で進められてきた。しかし、人口減少、高齢化がこれに拍車をかけ、過疎問題は、より複雑化、深刻化し、集落、地域自治体の存続に関わる問題にまでなっている。

物やサービスや情報が溢れ便利であることが「豊か」であるとする価値観が都市部に人を集中させる中、この6年間で空き家情報バンク制度を活用して豊田市の農村部に101世帯356人が移住している。（平成26年度末）。また、相次ぐUターンで地域の活力を取り戻した集落も生まれている。多少不便ではあっても農村の暮らしに豊かさを求める人たちの「農村回帰」である。

コミュニティの存続自体が課題となった今日、農村部からの人口流出防止策の色彩が濃い「格差是正」に加え、流入促進策としての「田舎の磨き上げ」が求められている。

自然の摂理にかんたった暮らしとそこから生まれる農村景観、支え合いの社会、エネルギーの自給や伝統的な食文化など風前の灯となつてしまった「田舎らしさ」に光を当て、次代にきちんと繋ぐこと。その技を持つ後期高齢世代が健在な今、取り組まなければ「田舎を田舎らしく磨き上げる」とは永遠に叶わなくなってしまう。高齢者のがんばり時だ。

2015年12月5～6日、豊田山下山地区と岡崎市下山学区で地域の活性化に取り組む「しもやま山ホームステイ」が主催して1泊2日のホームステイを実施しました。参加者は名古屋市や豊田市在住の20～30代の若者や親子など7名。5軒のホームステイ先では、ホスト家族や地域の人と参加者が一緒に、酒蔵でのラベル貼り、朝市やお社の祭りの手伝い、炭づくりのための薪割りや春に備えたトラクターでの田おこし、自然に生えている木を使った遊具づくりなどそれぞれの家の日常を体験しました。

参加者からは「想像していた田舎暮らしと似ているところも、違うところもあった。」「下山が大好きになった。また遊びに行きます。」などの声をいただきました。ホスト家族や地域の方からは「また来てね」の声が。この取り組みはこれからが本番です。このご縁を大切に深めていきたいと思います。

「しもやま山協議会
宮原 知沙」



新嘗祭の様子



干し柿作りの様子



薪割りの様子

しもやま山ホームステイ開催



下山
SHIMOYAMA

12/18 地域スモールビジネス 研究会



12/20 第1回あさひ森の健康 診断報告会



12/10 三河豊田駅ポスター 掲示効果アンケート



12/10 大ナゴヤ大学連携 田舎女子トーク第2弾



センターのあしあと

おいでん・さんそんセンターの
日々の活動を写真でご紹介。

詳細な情報は、Facebook ページを検索！



12/6 集落活動応援隊 旭・日下部町



邦夫 若い人の話も聞けるようになった。
一番嬉しいのは『褒められること』
辰吉 前に話しを聞いた時に、「夢中でやっていたらいつの間にか10年経った」と言われていましたが、そんなに熱中された理由は何なんですか？
邦夫 やっぱり都市の方たちに「田舎のおじいちゃん、おばあちゃん元気がいい！何でも出来てすごい！」と褒めてもらえたことですね。
経験がない方たちは、泥の中に入るだけでも驚きます（笑）。自分の孫にも振り返ってもらえないのに、よその子どもに褒められたら喜んじゃいますよ（笑）。
耕作放棄率と耕作率が逆転



辰吉 活動を続けられてきて田畑や山がとてもきれいになりましたよね。具体的に、どんな変化がありましたか？
邦夫 農地のことで言うと菅田和（すげだわ）集落では、耕流塾が本格スタートした平成20年に耕作率が24.4%で耕作放棄率が77.6%でした。それが平成23年には耕作率が23%になりました。
辰吉 それはすごいですね。山に関してはどうですか？
智 同じく菅田和集落で言うと、森づくり会議（町単位程度で森林所有者が組織し、間伐事業について話し合いを進めたりする場）を始めて、森づくり団地（森づくり会議のエリアの中に設定された5ヘクタール以上のスギ・ヒノキの人工林で、間伐を計画的に実施する区域のこと）も作られています。



移住者が10年で15世帯
辰吉 ぱっと見でも、見違えるような変化がありますね。人口に関して何か変わりましたか？
邦夫 今ちょっと数えてみますね。：新盛自治区全体では、もともとの出身者が戻ってきたUターンが12世帯、移住者のIターンが3世帯増えたようです。
辰吉 10年間で15世帯も増えたんですね。驚きです。耕流塾の活動を見ていた地元出身者が感銘を受けて戻ってきたんですね。様々な素晴らしい結果が出てきていますが、10年を迎えた今、これからの課題があれば教えてください。
将来に向けての課題



Before



美しかった山は、林床に日が差さないうっそうとした山に荒れ果ててしまった。

After



手入れの行き届いた美しい山里に再生した。

新盛里山耕流塾の取組



のどかで心地よかった田畑は、イノシシが闊歩する耕作放棄地になってしまった。



心地よい青々とした美しい田んぼに再生した。

智 里山耕流塾は今、菅田和を中心に行っています。新盛自治区の他の集落でも「自分の地域をもっときれいにしよう」という意識が高まって、同じような活動が広まってほしいと思います。
邦夫 今の活動から1段階ステップアップして、これから世の中の変化についていけるような持続的な里山の営みについて考えていけるようにしたいです。個人的には限られた農地を永続的に守る集落営農みたいなことをやってみたいと思います。

るのいいと思います。
辰吉 荒れた地域をどうにかしようとする場合、きつと新盛里山耕流塾が歩んできた道のりを辿ることになると思います。智さんが言われるようにここで温められたやり方が他の地域にも広がっていくことは重要ですね。邦夫さんが言われる「農という営みをしてながら地域を持続すること」はセンターとしても課題だと思っています。里山耕の新しい形に期待しています。
〔文・木浦幸加〕